はじめに

この物語はフィクションです。
登場する人物、団体等はすべて実在しません。
あらかじめご了承ください。

『実の姉と、後輩の女の子に優しくイジメられる生活』

※体験版

小松　とんねる

数年前。

天平はこの頃増してくるばかりの苛立ちが、どこからやってくるのかわからないでいた。

――これが世間でいうところの「思春期」ってやつなのか。

自分がちょうどそう言われる年齢に差し掛かっているのは自覚している。インターネットを通じて、他人が過去に経験したその頃のエピソードも閲覧しているので、誰しもが経験しているであろうことは知識として知っていた。

「けど」

果たしてこんなにもつらいものなのだろうか。

姉と会話する気力も起きず、かといって無視するほど天平は姉に冷たく当たることもできないため、ただ無気力に「ん」と返事することぐらいしかできなかった。

今日の煮物、良く味しみてるでしょ。

「ん」

もうエアコン点けて寝ないと暑くてたまんないよね。

「ん」

そろそろ天平も新しい服、欲しいでしょ。

「ん」

仕方ないなぁ、というように姉がテレビの画面に視線を戻すタイミングを見計らって、天平は素早く彼女の胸元を覗く。

家着用の薄いTシャツの下にはこぼれんばかりの大きなかたまりがふたつ、ぶら下がっていた。

――ああ。

あれに触れたい、思う存分揉みしだきたい、吸いつきたい。

そんな少年の当たり前ともいうべき初々しい性衝動にうずく当の本人は、そんな自分にますます苛立ちを憶えて仕方がなかった。知識として男と女がセックスをすることは知っていたし、快楽の形としていろんな性行為、性癖があることを知って

はいたが、それらはすべて「イケない」行為であり、あんなのは変態のすることだと、当時の天平は思っていた。当然だ。実は彼、この情報化社会に珍しいというべきか、その歳にして精通も未経験だったのだ。

クラスメイトが時折えっちな漫画や雑誌を読み比べていることも知っていたが、どうしてもその輪に加わる気にはなれなかった。普通ならそういう「ちょっと変わった子」というのは集団のいじめに合う可能性もあったが、運の良いことに天平がラグビーをやっていることは皆知っていたし、体育の授業を前に、体操着に着替えるときに裸になる彼の上半身が未発達ながらも素晴らしい筋肉で覆われているのを見ると、周りもいじめる気にはならなかった。

結果、幸か不幸か、彼は性に対して限りなく透明に近い認識のまま、無事に思春期を迎えてしまったのだ。

「風呂」

短く彼は姉に告げると、さっさと居間を出て脱衣所へと向かった。

姉が心配そうにその背中を目で追っていることには気付かなかった。

「んぐ」

シャンプーのノズルを押すと、勢いよく中身が飛び出た。
白くてどろりとした液体が口に入り、思わず彼はせき込んだ。
何をやってもうまくいかないときは長い人生において時々あるものだ、という事実を理解するには彼はまだまだ●すぎた。
心をうまく制御できない自分が情けなくて、涙が出そうになる。他人に見られるのは恥ずかしいので、彼が泣くのはもっぱらトイレか風呂場だった。
蛇口をひねって彼はシャワーを出しっぱなしにした。これで万が一にでも泣き声が外に漏れる心配はないだろう。湯気が桃色のタイルで覆われた浴室の壁を隠した。彼は悔しくて、何が悔しいのか、何にそんな腹が立つのかもわからないまま静かに泣いた。小さなモグラの鼻先にも似たペニスは縮こまっていた。まだ毛も生えていない、赤ん坊のようなそれ。
「てんぺーちゃん」
後ろから女の人の声がした。
しかも聞き覚えのある声だ。彼は慌てて腕で目をごしごしとこすって、椅子代わりの湯桶に座ったまま答えた。
「なんだよ」
「久しぶりにおねーちゃんも入っていい？」

「だ、だめだよ」
ダメに決まってるだろ、と天平は脱衣場に向かって叫んだ。
「どうして？」
「だって俺、もう○学生だよ。沙樹姉(ねえ)と入るなんて」
「いいじゃない。アタシが入りたいって言ってるんだからさ」
たまには姉のワガママ聞いても罰当たらないと思うよ、とガラス越しのシルエットが答えた。
「うぅ」
衣擦れの音がする。姉が服を脱いでいるんだ、ということはその音と気配でわかった。意味のわからない興奮が彼を包んでいた。そして「イケない」という想いがそれと交錯していて、天平は唸ることしかできなかった。
「入るよー」
がらり、と浴室の入り口が開けられて、天平は慌てて背中を向けて目の前の鏡に視線を移した。そこには後ろに立つ姉の脚と、彼女の全身を覆っているであろう白生地のタオルが湯気の隙間に映っていた。
がっかりしたような、ちょっとホッとしたような。
「もう頭と身体は洗ったの？」

「洗ったよ」
「じゃアタシ洗っていい？　先に湯船浸かって」
「ん」
彼は立ちあがろうとして、そして気付いた。自分の下半身がぴん、と上を向いているのだ。小さいながらも、それでも普段の倍以上も体積を増したそれの先端からは透明の滴が溢れてきている、シャワーのお湯ではない、間違いなく先端から出てきているのだ。
――あぁ。
こんなところを実の姉に見られるわけにはいかない。
なぜか天平は怒られる気がして、慌ててそれを両手で隠した。
「ほら」
「ん」
わかってるよ、と言い、姉に背中を向けたままなんとか湯船に身体を預けることに成功する。たぶん。
「ちょっと待っててね」
何を待つのか知らないが、とりあえず湯の中でも衰えを知らないそれは硬度を保ったままだ。どうにかしなくては、との焦るも何をすればそれが収まるのか、天平

にはわからないのだ。マスターベーション、という行為は今の彼からすれば悪(あく)そのもので、それをするという選択肢はなかった。

そして。

さらに。

「沙樹姉ぇ、ちょっと」

「んー？」

「なんでタオル取ってるんだよー」

「だって脱がないと身体洗えないでしょ」

おかしなてんぺーちゃん、と彼女は意に介さずにボディタオルで身体を泡立てる。長い髪は後ろでひとつに結ばれている。スタイルの良い姉が全裸で自分を洗う動作にてそれは小さく揺れ続ける。

「あ、あ」

柔らかそうな胸の真ん中にあるピンク色のボタンが見える。脚のつけ根にある豊かな繁みからはじけ飛んだお湯が滴り落ちるのも見える。

「駄目だって、沙希姉ぇ」

もはや彼の声は上ずり、硬くとがったモグラの鼻がひくひくと湯船の中でうなずいていた。

彼は前を手で精一杯抑えるが、いくら両手を押し付けても小さなそれをなだめることができなかった。
そんな弟の情けない仕草に気付いたのか、沙樹は「別に恥ずかしがらなくていいよ、昔から見慣れてるんだから」と笑顔で返す。
――違うんだ沙希姉。昔とは違う形に今、なっちゃってるんだ。
そんな天平の心の叫びはむなしくもシャワーの音に混じって消えてしまうのだった。次に彼女は恐ろしい一言を放ってのけた。
「ほら。てんぺーちゃんの身体、久しぶりに洗ってあげる」
「え、いいよ」
「駄目よ、アタシのワガママはまだ終わってないんだから」
有無を言わさず、といった程で姉がおいでおいで、と手招きしている。こうなったら出て行かないわけにはいかない。そして浴層は、背の小さな彼が手放しでまたぐには少し高すぎた。できないことはないが、足を滑らせる危険性がそこにはらんでいたのだ。ということは、である。前を隠さないで湯船から上がらなければいけない、ということだ。まさかこの年になって姉に身体を支えてもらうわけにもいくまい。
ざばん。

一瞬、彼は両手を離して湯船から出た。
水圧を撥ね退けるようにしてびよん、と脈打ったペニス、姉が見守るようにして天平のことを見ているのが分かった。きっと、いや絶対に彼の下半身も視界に入っているだろう。
「はい、じゃ背中流すよ」
――あれ。
姉は何も言わなかった。
湯桶に彼を座らせると、優しく背中をごしごしとタオルでこすり始めた。
――見えなかったのかな？
いや、そんなはずはない。天平は混乱のままにされるがままになっていた。依然として硬さを保った下半身は一直線に天井を向き、その様子は鏡にすべて映し出されていた。
「あ、あ」
もはや言い逃れはできない状況だった。先走りの液体がどくどくと流れ、ひくひくと揺れる下半身に姉がちらちらと視線を送ってくるのが、はっきりとわかった。
――見られてるよー、ぜんぶ。イケないのに。こんな。
恥ずかしかった。が、恥ずかしいと思うたびにそれに呼応するようにしてペニス

は唸り、幹をぶるんぶるんと揺らすのだ。自分の意志ではどうにもコントロールできない。いや、むしろ腰の辺りに力を入れれば元気良くうなずいてしまう。
「はぁ、はぁ」
気付けば天平は荒い呼吸を繰り返していた。沙樹はそれを知ってか知らずか、黙って弟の背中を泡立て、やがて湯で流してゆく。彼女の乳房もまたゆらゆらと揺れているのが鏡越しに伺える。
「はい、こっち向いて」
「へ」
「へ、じゃない。こっち向かないと前洗えないでしょ」
「ま、前はいいって」
「はいはい」
「はいはいって、洗う気まんまんじゃないか」
「当たり前でしょー」
少しは姉に成長した姿を見せてよー、と無邪気に沙樹は天平の片足をつかんで、いとも軽々と天平の身体を反転させてみせた。
「あぁ」
片足だけひっつかんだ状態なので、自然と彼は股間を開いた形で姉に向き直る羽

目になる。あぁ、と天平はもう恥ずかしすぎて姉のことを見てられず、対して姉のほうはというと弟の顔を背けるのにも気にせずにどんどん肩、腕、腹、へそと洗い終えてゆく。下腹部を手で隠すことも忘れて、剥き出しの小さなペニスはもはや姉の目の前でぴくぴくと揺れている。と、姉の手が止まった。

おそるおそる姉のほうを向いてみると、彼女の視線は下のほうに向けられていた。当然、そこにあるのは。

「うわぁ」

「すごい」

慌てて手で隠すが、何もかもが手遅れだった。

「隠さないでいいよ。もうばっちり見ちゃったし」

「み、見るなよー」

「いいから、ほら」

手を無理やりどかされ、両足の間に座る姉のために股を閉じることもできず、無防備なペニスを成人女性にさらけ出してしまっていた。

「すごい」

「あぁ、見ないで。見ないで」

「恥ずかしがらなくていいんだよ。男の子だもん、こうなっちゃうのは仕方ない

よ」
「んなこと言われても恥ずかしいって」
「そう？」
そして沙樹は「ねぇ、てんぺーちゃんは普段、自分で、その、してるの？」と訊いてきた。
「してるって、何を？」
「もう、そういうこと女の子に言わせるつもり？」
てんぺーちゃんのえっち、と姉は微笑んだ。どうやら怒られることはなさそうだ。彼は首を振った。
「別に何もしてないよ」
「そっか」
だからなんだね、とひとりで彼女は納得したようにうなずいている。
「どういうこと？」
「ねぇ。てんぺーちゃんは最近落ち着かないでしょ。理由もなく苛々しちゃったりするでしょ」
「な、なんでそれを」
「ときどきアタシのおっぱい、覗いたりもしてるでしょ」

――ば、ばれてる。

天平の顔は羞恥心で真っ赤になった。ところが恥ずかしくなればなるほど、生ぬるい、それでいて心地好い重さが腰のあたりを支配し、彼の小さなペニスは跳ね上がった。

「ほら」

姉の柔らかい指先がペニスに触れた。

びくんっと、全身が震える。

姉が口を彼の耳元に寄せてきて、なぜか小声で「ねぇ、アタシのおっぱい触りたいって思っちゃうでしょ」とずばり言い当ててきた。

「うぅ」

右手の細い指が亀頭周りの皮を撫でる。

「おっぱいに吸いつきたいって思うでしょ」

「おちんちんの辺りが落ち着かなくて、むず痒くてどうしようもなかったりするでしょ」

逆らうことはできなかった。天平は黙ってこくん、とうなずいた。

「大丈夫、それで正常なの」

「イケないことだろ」

「うぅん。男の子は皆そう思うようになってるんだよ。だから大丈夫」
左手はさわさわと、しわくちゃになった袋の裏側を撫で上げた。天平は自分の背筋がぞくりと震えるのがわかった。
くすっと沙樹が笑う。
「敏感なんだね。ねぇ」
――どうしたら身体が楽になるか、教えてあげようか。
悪魔だ、と天平が思ったかどうかは定かではない。ただ賢明な読者諸君にはどうかこの二人を責めないでやってほしい。姉は弟のことを思うあまり、弟は好きな姉に逆らうことはできず、そして二人とも若者にとって当たり前のようにある深い深い性欲の溝から、抜ける術を知らなかっただけなのだ。
「ほんと？」
「うん」

「ほら。もっと足開いて」
今や天平は足を思いきり広げて、姉に全てをさらけ出していた。さっきまでもそうだったが今度はもっと、だ。

――は、恥ずかしい。
姉は天平のペニスをゆっくりとしごき始めた。皮ごと。
「あら、ちゃんと剥けるんだね。普段から剥いて洗ってた？」
「う、ん。友達に洗った方がいいぜって言われて」
「えらいね。ふふ、でもまだだいぶ皮が余ってるけど」
「やめてくれ、沙樹姉ぇ、言わないで」
「恥ずかしい？」
「恥ずかしい、よ」
しゅ、しゅ、くちゅ、くちゅ。
その手つきは優しかった。時折、皮をすべてずり下げてピンク色のそれが顔を出す。その様子をじぃっと姉は見つめていた。
「ほら、ほら」
「あぁ、沙樹姉ぇ、ダメだよ」
ダメと言っても姉は手を止めてくれず、むしろ手の動きを加速させているような気がした。天平も、それを厭とは思わなくなっていた。
「すっごく硬いね、てんぺーちゃんのおちんちん」
「あぁ、女の人がそんなえっちなこと言っちゃいけないって」

そう？　ととぼけた表情をしてみせる彼女は再び弟の耳に囁いてきた。
「でもアタシが「おちんちん」って言うたびにココが震えるのはどうして？」
「うぅ、それは」
「興奮してるんだよねー、えっちなイケない弟ね」
――さっきは「だいじょうぶ」って言ったくせに！
だがその反論を声に出す気力はすでに天平にはなかった。
姉の手にまかせるまま、目を瞑って腰ごと預けていたが、ふと気になって薄目で姉のことを見てみる。
かがんだ姉の胸元で見るからに柔らかそうなメロンがふたつ、ぶらぶらと無造作に揺れている。
「あ、ごめん。おっぱい触りたい？」
ぶんぶんと首を振るが、しっかりと目に焼きついた姉の乳首が脳裏から離れてくれそうにない。ますます下半身が重たくなるのを感じる。
「素直になっていいよ。ほら、おっぱい触って」
「あああ」
両の手を姉の胸に導かれる。おそるおそる触れるとこの世のものとは思えない柔らかさと温もりがそこにあった。

「気持ちいい？」
恥ずかしすぎて答えられないが、仕方なく首を縦に振る。
ふふ、と嬉しそうに笑う姉はまた天平の股間に視線を送った。
「てんぺーちゃんは見られたりえっちな言葉言われると興奮しちゃうイケない男の子だったんだねー。もっと言ってあげるね」
「だめだって」
「ちんちん、ちんちん。てんぺーちゃんのおちんちん、硬いよ。えっちなちんちん。お姉ちゃんのおっぱい見て勃っちゃってるイケないちんちん。お・ち・ん・ち・ん」
――あぁ。
しゅ、しゅ、しゅ、しゅ。
決してハイスピードではない姉の手つきだが、何かが身体の奥のほうから込み上げてくるのを天平は感じた。
「もうだめだ、沙樹姉ぇ」
「何か出ちゃう？　イッちゃう？」
それがおしっこではないことは天平自身にもなんとなくわかった。急いで天平はうなずく。

「出ちゃうよぉ」
と、姉の手がぴたりと止まった。
「へ」
突然、姉は指をそこから離して、タイルに三つ指をついた状態で弟の下半身を見守っていた。
「ん？　どしたの」
「いや、あの、その」
恥ずかしさでプルプルとペニスが震える。
「んーどうしたの？」
もっとちんちんを弄ってほしかった。だがそれを言うということは自分の中に眠る性欲を認めるということに他ならない。
――沙樹姉のいじわるっ！
彼は声に出したいのを必死でこらえた。もう恥ずかしすぎて何がなんだかわからなくなってくる。
――だめだ。我慢できない。
無意識のうちに彼は姉の目の前で、腰をかくかくと振っていた。ちょうど姉にペニスを突き出す格好だ。

――恥ずかしいのに、恥ずかしいのに止まらないよ。
「あらあら、恥ずかしいね。そんな腰振っちゃって」
囁きは止まらない。
ぜんぶ見ちゃってるよ。てんぺーちゃんのちっちゃくて恥ずかしいとこ、お姉ちゃんにぜんぶ見られちゃってるよ。恥ずかしい？　恥ずかしいねー。
「ほら、もっと腰振って。てんぺーちゃんの恥ずかしい姿、見ててあげるから」
「うぅ」
かくかく。
後ろ手で床に手をつき、身体を固定したうえで天平はよりいっそう腰を前後に揺すった。なぜ自分がそうするのかはよくわからなかったが、彼の本能がそうしろと言っていた。
「びくんびくんって、おちんちんの先っちょが震えてるよ。てんぺーちゃんの可愛いちんちん、ねぇ何か出ちゃうんでしょ？」
「ん、うん」
出そう、とだけ彼は言った。
「いいよ。ぜんぶ見ててあげる。自分で腰振ってすっきりしちゃいなさい」
――あぁっ。

びよんと揺れるペニスから姉は視線を外してくれない。わざとらしく頬杖をついて、ときどき弟のあえいだ表情を盗み見る。
天平はよりいっそう腰を激しく動かした。もはやそれは空気抵抗の摩擦が起こす快感にすら耐えられなくなっていた。
――ああ恥ずかしいよー。
「だめだ、咲樹姉ぇ、見るな、見ないでー」
「でもおちんちんはもっと見てって叫んでるみたいだよ？」
「ち、違うよー」
「うそ、嘘つき。いいんだよ、てんぺーちゃんがえっちでヘンタイさんだってこと、お姉ちゃんはもう知っちゃってるから」
「うう」
「ほら、ほら頑張って」
ああ。
「だめだー」
がくんがくんと、天平の全身が震えた。
「ほら、びゅっびゅっって出して。お姉ちゃんに射精するとこ見せて」
「あ」

最後に元気良く天井にピンっと背筋を張ったそれから、白くて粘ついた液体がはじけ飛んだ。瞬間、天平は「さっきのシャンプーよりだいぶ粘っこいな」とぼんやりとその様子を眺めていた。

びゅ、びゅ、びゅ。

どぴゅ。ぴゅ、ぴゅるー。

熱いマグマのように噴出したそれは二人の身体に容赦なく降り注いだ。

ぴゅるる、どびゅ、びゅ。

「ああ、すっごいたくさん出てるよー」

いやん、と短い悲鳴を上げながらも、咲樹は天平のペニスに顔を近づけてくる。

びゅ、びゅ。

いつまでも出続けるかに思えたその噴出はやがて、がくんがくんと数回の空打ちを経て、終わりを迎えた。

「あん」

びるっ。

最後にもう一発、一番高く飛び上がったモノが姉の頬に張り付き、そのときにはたわわに実っている乳房の横顔はだらだらと淫らに、白濁した液で濡れていた。

「はぁ、はぁ」

「あん、はぁ」
頭がぼんやりしていた。互いの息遣いが浴室に響いている。
びくびくと脈打っていたペニスが縮み始める頃になって、天平は意識を徐々に取り戻していった。
「さ、咲樹姉ぇ…その、ごめん」
「んー、なんで？」
「その、顔にかけちゃって」
なんだそんなこと、と姉は優しく微笑んでくれた。
「いいの、可愛い弟の精子だもん。汚くなんかないよ」
「せいし？」
「そう。この白くていやらしい液が精子だよ。てんぺーちゃんもすっかり大人だね」
「そう、なんだ」
これが精子か。
なんだか妙な感動が天平をしばらくは包んでいたが、ペニスが萎えていくのと同時に忘れかけていた恥ずかしさがこみ上げてきた。
「俺、ヘンタイなのかな」

「うん、てんぺーちゃんはへんたいだよ」
少しは慰めてくれよなー、と文句を言うと「別にヘンタイでいいじゃない」と姉は弟をぎゅっと抱きしめてくれた。
――咲樹姉の身体、柔らかい。
「ふふ。おちんちんもこんなに可愛くなっちゃって」
小さくしぼんだそれを再び彼女はころころと弄り回してくる。
「恥ずかしくて情けない皮かむりのおちんちんだね」
「や、やめてくれ」
むくり。
「あ」
「ふふ、てんぺーちゃんのヘンタイ」
そう言って姉は強く天平の頬を自分のおっぱいに押し付け、乳首を吸わせるのだった。
「や、やめ。ん、んちゅ、くちゅ」
「ほーら。えっちなてんぺーちゃんの大好きなお乳だぞー」
ペニスが再び天井を向いた。
天平は抵抗できず、自分から乳首のポッチを吸い上げることで姉に答えた。

それ以来、姉には頭が上がらなくなった。

つづく

この作品における、著作権は著者にあります。
無断での使用は固く禁じます。

午後のお姉さん　編集部より